

武田薬品工業株式会社 京都薬用植物園の見学会

実施日：2012年10月17日（水）

場所：京都府京都市左京区一乗寺竹之内町11 武田薬品工業株式会社 京都薬用植物園

対象：大阪薬科大学「生薬学1」履修者および関西大学化学生命工学部「生薬学1」および「生薬学2」履修者の中の実習希望者

大阪薬科大学の「生薬学1」の履修者向けに実施される京都薬用植物園の見学会が、関西大学の「生薬学1」および「生薬学2」の履修者に向けても実施されました。昨年までは「薬用植物学」の講義の一環で実施されていたとのことでした。京都薬用植物園は叡山電鉄の修学院駅から曼殊院へ向かう上り道の手前に位置していました。天候は生憎の雨模様でした。築2年という京都薬用植物園の新築の建物内の室内にて、はじめに大阪薬科大学の銭田先生より乾燥品ではなく生きた状態の実物の観察がいつまでも心に残る体験になることや、薬剤師の現場では漢方薬の比重が想像以上に大きいなどのお話がありました。次に今村芳功 園長より施設の概要や活動についてのお話がありました。今村園長は大阪薬科大学OBとのことでした。京都薬用植物園は通常は一般公開していませんが、医療系大学の教員向けや、小学生向けの薬学教育活動だけでなく、生物多様性の保全活動などにも取り組まれているとのことでした。



最初に小班に別れ、野外施設の漢方処方園に向かいました。武田薬品の職員の方が担当に付いてくださり解説してくれました。この区画では漢方薬に含まれる生薬の元となる生きた植物が揃えて植えられており、ひと目で漢方薬に何が入っているのかが理解できる構成になっていました。職員の方からは「生薬学1」の講義でも取り上げられた生薬の主要な有効成分に対する問いかけなどもありました。講義で大阪薬科大学の芝野先生が話されていた薬用人参は日陰で栽培されるという事例も見ることができました。



次に阪神大震災のときに神戸で被災して取り壊しが決まっていた洋館を保存修復するために移築した建物内で刻みの植物生薬、動物生薬、漢方の器具類について見学しました。珍しいものでは正倉院の蘭奢待と同じ種類の生薬や、麝香などもあり、現在では希少動物で捕ることが許されない海棲哺乳類の一角の角にも触ることができました。建物内の壁は小磯良平画伯の植物画で飾られていました。



次はまた野外に出ましたが、小雨は止んだり、降ったりという状態でした。国内の希少種やヨーロッパの薬用ハーブ類の区画を見学し、砂糖の代替甘味料のステビアなどを口に含んで味わいました。厳重な金網の中ではジキタリス、トリカブト、花の咲いたチョウセンアサガオなどを観察しました。



その次ぎは蓮をはじめとして水生植物の区画にいきました。また別の区画では、ウコンや、クコ、食用菊など食べられる植物や、綿なども栽培されていました。華岡青洲の紫雲膏の生薬に含まれる絶滅危惧種のムラサキの植生も観察することができました。職員の方によるとウイルス感染しやすい植物や、異種交配しやすい植物はカルスから育てて植え直しているとの話でした。



絶滅危惧種 (C1)
Lithospermum erythrorhizon Sieb. et Zucc. "Ayabe"
 ムラサキ Boraginaceae
 ムラサキ科
 [属] 紫雲 根 消炎・解熱・解毒・肉芽形成促進
 root granulation accelerator

最初の建物内に戻ったところ、煎じられた温かい桂枝湯や半夏厚朴湯が用意されており、これらの漢方薬を試飲しました。前日の第一回目の見学会では時間が大幅に超過したことや今日は雨のこともあり、今回は押さえ気味に施設を案内したとのことでした。午後 4:30 までの長時間の実習でしたが京都市内を見下ろす広大な敷地内で貴重な体験をすることができました。雨天のなか担当してくださった武田薬品株式会社 京都薬用植物園の職員の方々に深く感謝致します。

